

# ART BE KOBE

## 「ART」「うみ」「ひと・まち」「やま」へのトビラ

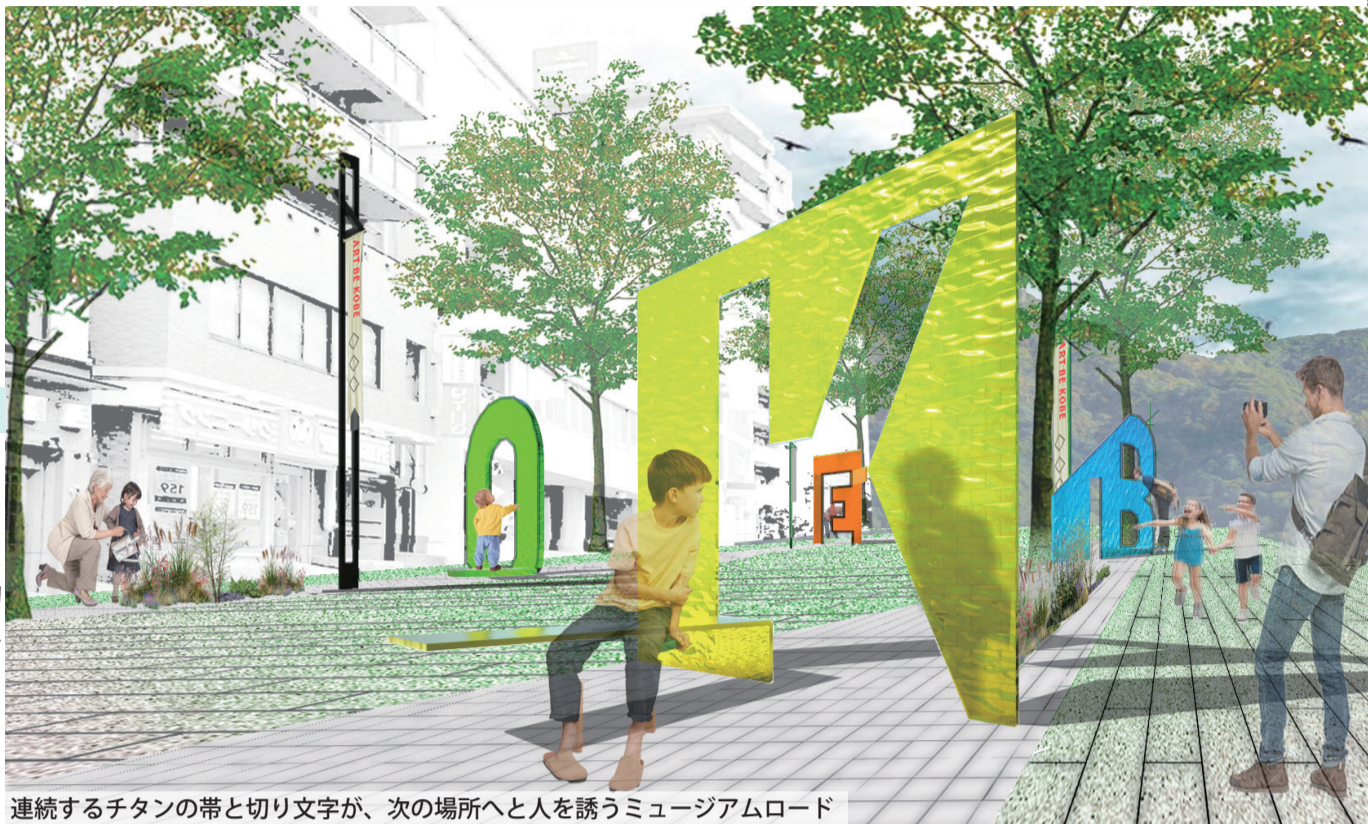
神戸らしい「うみ」「ひと・まち」「やま」を感じながら歩ける、新しいミュージアムロード【ART BE KOBE】。道沿いに配置されるチタンの帯は、作品を展示するものではなく、街の風景や出来事を「ART」のように感じさせるためのし掛けです。チタンの帯に設けられたさまざまな開口部は、光や風、人の動きとともに表情を変え、「うみ」「やま」や街並み、文化施設の一場面を切り取る「額縁」となります。人は思わず立ち止まり、覗き込み、次の風景へと誘われながら歩いていきます。その過程で、人の営みや街の出来事、身近なモノや記憶が自然につながり、神戸という都市を新しく「見つける」体験が生まれます。

## 「ヒト」「モノ」「コト」をつなぐ「ART BE KOBE」

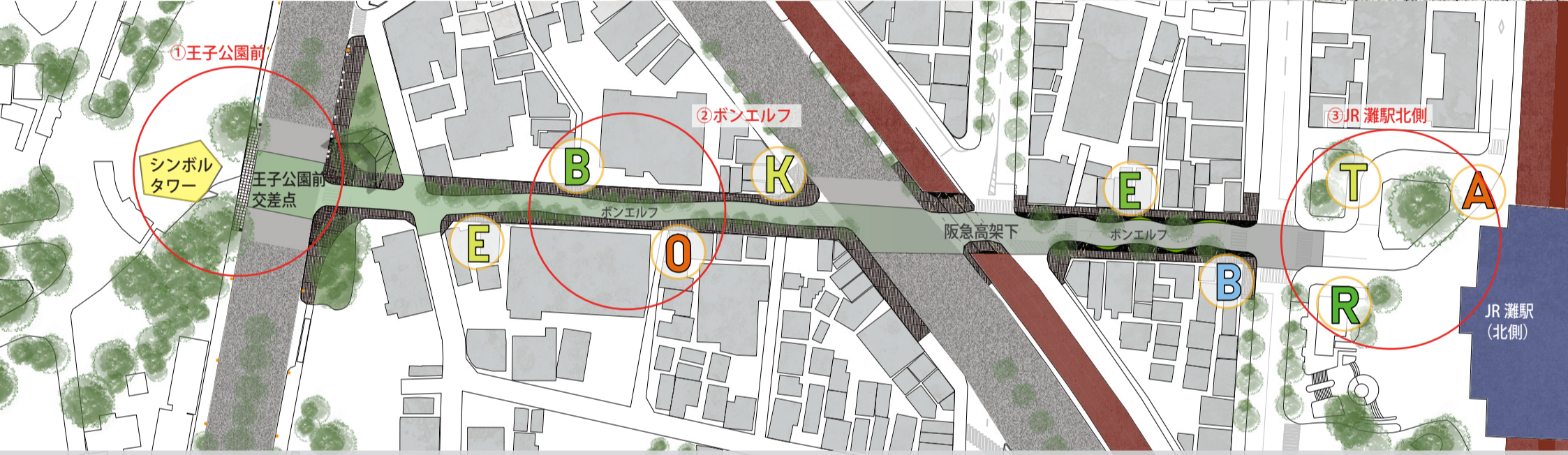
**見つける「ヒト」**  
歩く中で、人の動きや表情、集う姿が風景の一部として浮かび上がります。何気ない日常の中に、神戸らしい「ヒト」の魅力を見つけていきます。

**つなぐ「モノ」**  
街並みや建物、文化施設、身近なモノが、額縁のような開口を通して切り取られます。点在する風景が緩やかにつながり、一つのミュージアムとして感じられます。

**誘う「コト」**  
立ち止まり、覗き込み、歩き続けます。そうした行為の積み重ねが、散歩や通勤、イベントといった「コト」を生み出し、道そのものを楽しい体験へと変えていきます。



連続するチタンの帯と切り文字が、次の場所へと人を誘うミュージアムロード



■ミュージアムロード「ART BE KOBE」を紡ぐ【5つのキーワード】 / JR 灘駅を基準に南北方向に展開する「ARE BE KOBE」

- ①南北軸 (やま ⇄ うみ)  
山から海へと貫く都市の軸
- ②象徴性 (サイン)  
歩くほどに展開する空間のつながり
- ③連続性 (シーケンス)  
進む方向を示す記憶のしるし
- ④額縁化 (フレーミング)  
風景を切り取る視点のかたち
- ⑤居場所化 (ポケットスペース)  
立ち止まり、過ごすための場



ミュージアムロードのもう一つの起点として、強い存在感を放つ場所とします。広場に立ち上がるシンボルタワーは、遠くからも認識できる目印となり、視線を山へと引き寄せます。塔の上からはミュージアムロードの連なりが一望され、その流れは街を越えて海の方へと開かれていきます。ここで人は立ち止まり、風景を確かめ、次の一步を踏み出します。



山と海、人の動きが折り重なり、風景となるJR 灘駅



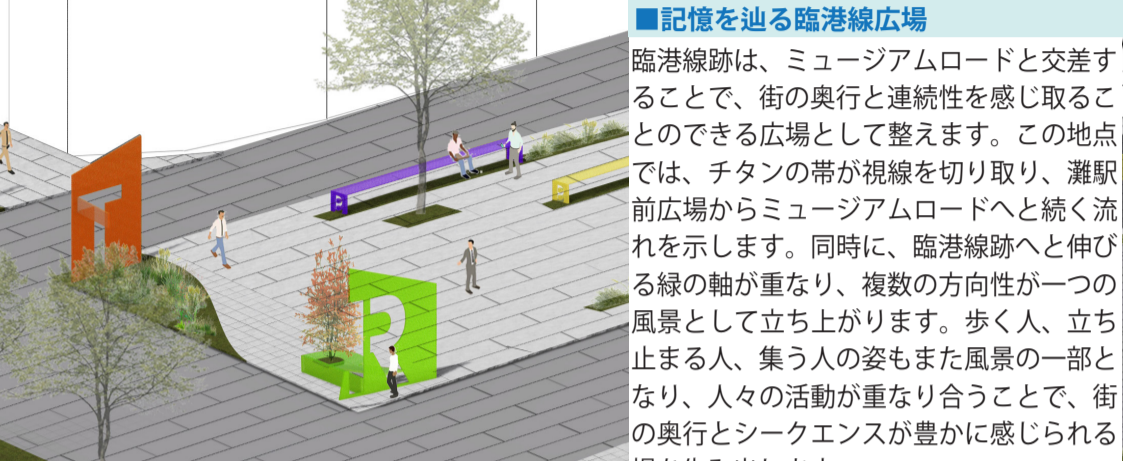
視線と人の動きが交差し、街の奥行を感じる臨港線広場



③ JR 灘駅北側「A」「R」「T」

■ARTのトビラを開く JR 灘駅

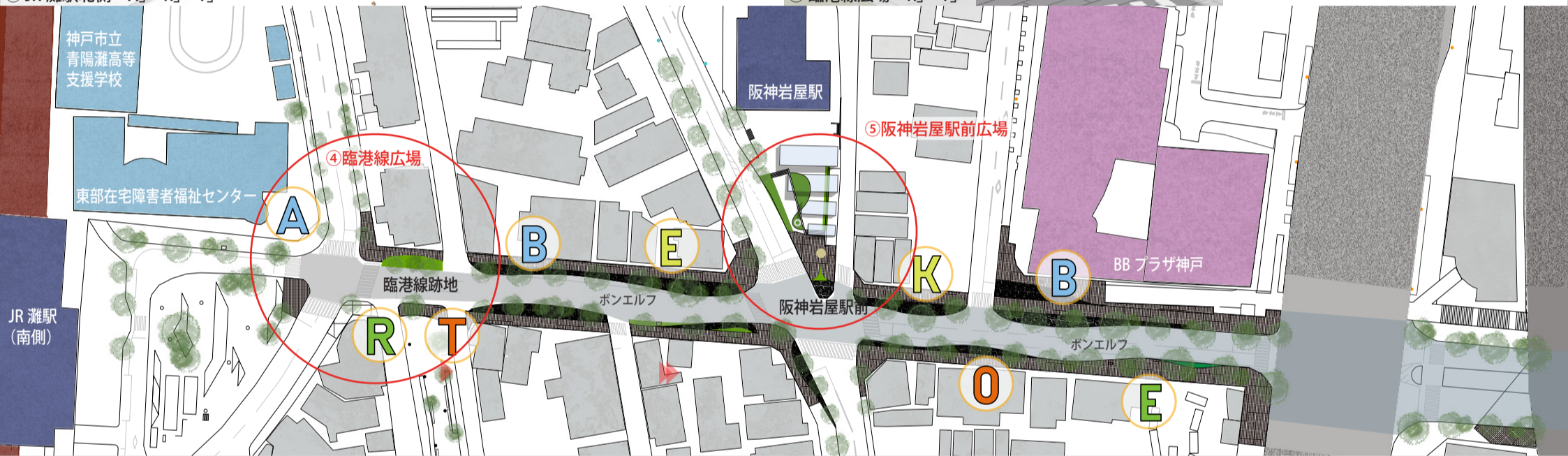
JR 灘駅北側交差点は、駅に降り立った人がミュージアムロードを北へと歩き始める最初の場です。「帯」によって一体化された交差点は、街の中に道の入口を静かに浮かび上がらせます。信号を待つ間、人は帯に腰掛け、切り抜かれた開口の向こうに行き交う人の気配を感じ取ります。帯や路面にはデジタルサイネージやプロジェクションによる演出を施し、周辺施設の情報やイベントを発信します。人が集い、言葉や視線を交わしながら、ミュージアムロードの始まりを発見する場となります。



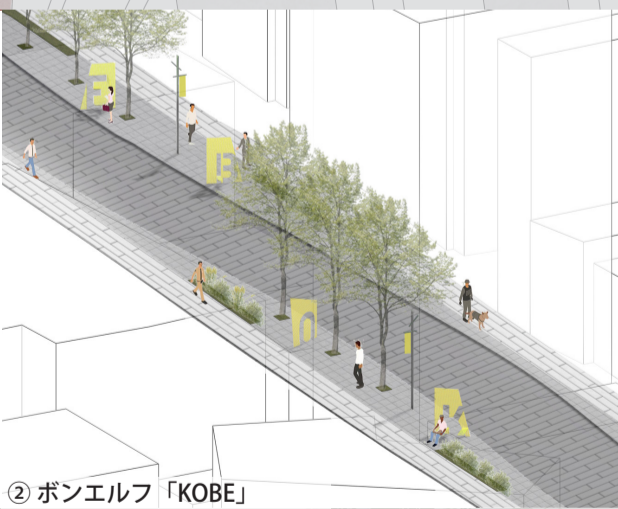
④ 臨港線広場「R」「T」

■記憶を辿る臨港線広場

臨港線跡は、ミュージアムロードと交差することで、街の奥行と連続性を感じ取ることのできる広場として整えます。この地点では、チタンの帯が視線を切り取り、灘駅前広場からミュージアムロードへと続く流れを示します。同時に、臨港線跡へと伸びる緑の軸が重なり、複数の方向性が一つの風景として立ち上がります。歩く人、立ち止まる人、集う人の姿もまた風景の一部となり、人々の活動が重なり合うことで、街の奥行とシーケンスが豊かに感じられる場を生み出します。



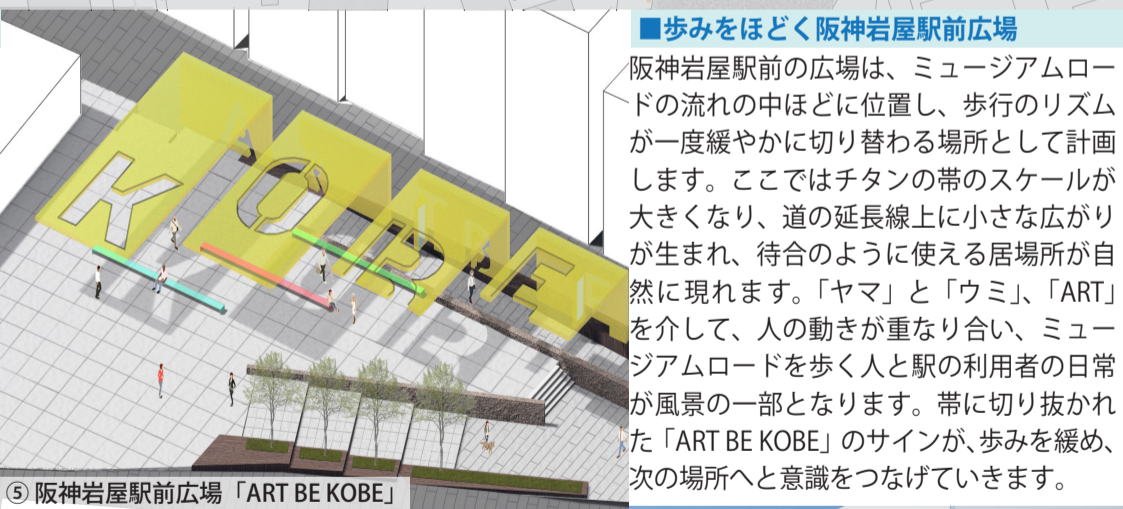
**発見を生む【チタン帯】**  
神戸由来のチタンに切り抜かれた文字と、折り曲げによって形づくられるファニチャは、人の動きや佇まいに呼応し、のぞく・うつる・すわるといった行為を生み出します。その振る舞いの積み重ねの中で、まち・ひと・やま・うみが風景として立ち上がり、新たな発見が連なっていきます。



② Boneruf「KOBE」

■ARTへ誘うBoneruf

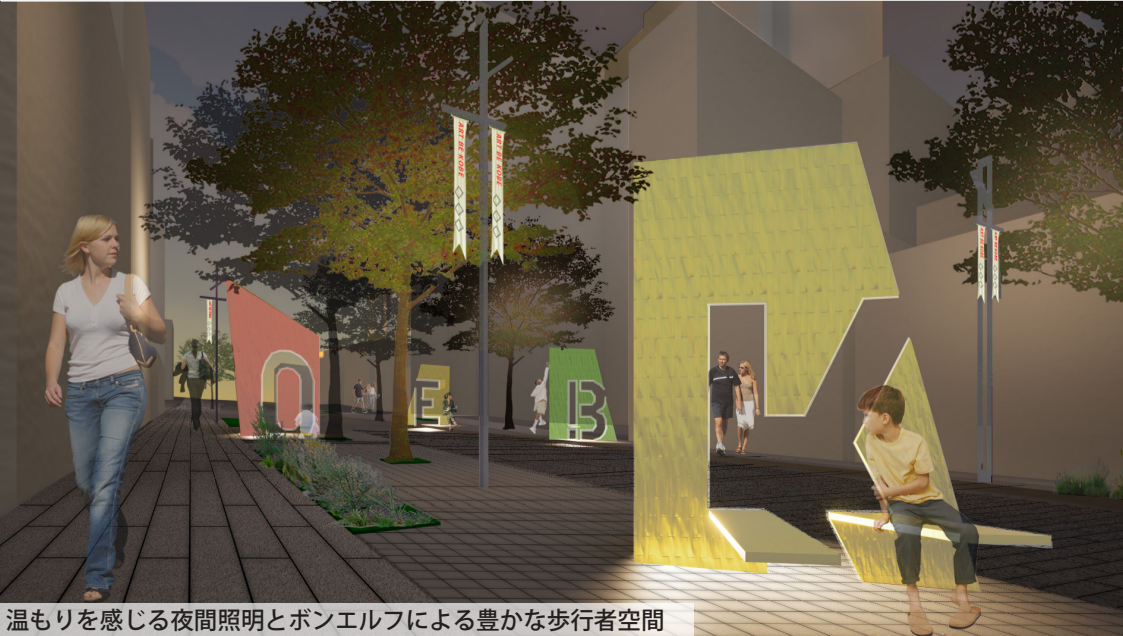
阪急高架下から周辺道路は、車の速度を抑えたBonerufとして、歩行者が安心して過ごせる通りへと再編します。道にはゆるやかな広がりや抑揚を持たせ、チタンの帯を配することで、歩く人に方向性と心地よいリズムを与えます。その広がり、憩いや会話が自然に生まれるポケットパークとなり、日常の中に小さな居場所を点在させます。さらに、植栽の種類や配置、密度を工夫することで、樹間が南北へと徐々に開きながら連続し、緑陰の中に人が自然と立ち止まり、滞留する豊かな歩行空間を生み出します。



⑤ 阪神岩屋駅前広場「ART BE KOBE」

■歩みをほどこす阪神岩屋駅前広場

阪神岩屋駅前の広場は、ミュージアムロードの流れの中ほどに位置し、歩行のリズムが一度緩やかに切り替わる場所として計画します。ここではチタンの帯のスケールが大きくなり、道の延長線上に小さな広がり生まれ、待合のように使える居場所が自然に現れます。「ヤマ」と「ウミ」、「ART」を介して、人の動きが重なり合い、ミュージアムロードを歩く人と駅の利用者の日常が風景の一部となります。帯に切り抜かれた「ART BE KOBE」のサインが、歩みを緩め、次の場所へと意識をつなげていきます。



温もりを感じる夜間照明とBonerufによる豊かな歩行者空間



交流と滞留をうむ阪神岩屋駅前広場

